

広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第65号 2016 11-18

中国高級中学の教育課程にみる多様化策

— 江蘇省の大学入試改革との関連に注目して —

小川 佳万・小野寺 香¹

(2016年10月6日受理)

The Diversification Policy of Senior High School Curriculum in China
— From the point of college entrance examination in Jiangsu Province —

Yoshikazu Ogawa and Kaori Onodera¹

Abstract: This paper discusses how 'character education' and 'holistic development in education,' which are the key words of the curriculum reform of recent China, have been made the best use of the college entrance examination process of Jiangsu Province as case study. In other words, it tries to clarify where the point of the college entrance examination reform in recent years is from the point of senior high school curriculum issues. The following three points are clarified by the main discourse. First, the diversification of the curriculum means an increase of the number of subjects and an increase in the optional subjects. 'Character education' is to cover such diversified contents firmly although every day classes tend possibly to be biased to 'college examination subjects' such as 'foreign language' or 'mathematics.' It is necessary to synchronize with the college entrance examination to bear fruit, and, in fact, the number of examination subjects has been increased actually in Jiangsu Province. Secondly, it is more influential to decrease the number of the examination subjects for reducing the mental burden of students. In this sense, it is reasonable to introduce 'integrated problem' subject to examine students' expression and judgment abilities as one strategy. Thirdly, it is possible to introduce interview and short essay examination as one idea if college sides try to evaluate 'subjectivity' valued by 'character education.' Although small number of universities introduce 'independent recruitment,' the majority do not due to the huge number of examinees. It may be true that China still emphasizes more wide variety of knowledge than 'subjectivity' and 'expression ability.'

Key words: China, Jiangsu Province, College Entrance Examination, Curriculum

キーワード：中国、江蘇省、大学入試、教育課程

はじめに

中国は社会主義市場経済の浸透による経済発展、世
関貿易機関 (WTO) への加盟、北京オリンピックの
成功等により世界的に存在感を増し、近年21世紀を牽
引する国家を担うグローバル人材の育成と国民全体の
教育水準の向上に取り組んできている。その際の国家
としての目標は、急激な変化に対応でき新たなものを

創造していく「创新型国家」であり、それを担える人
材を豊富に擁する「人材資源強国」である。一方で、
中国の教育は従来から過度の知識偏重と試験中心の学
校教育に陥っていると厳しい批判が寄せられ、その是
正が教育改革の大きな柱の一つとなってきた。

そして、その教育改革のキーワードとして1990年代
以降頻繁に登場してきているのが「素質教育」である。
この中国語の「素質」とは日本語の「資質」、「素養」、「人
格」に近い意味であり、したがって「素質教育」とは
知識のみに偏らず徳育、体育も重視して子どもの全面

¹奈良女子大学

的な発達を促す教育となる。また、それは「応試教育」の反対語であると言えば、より理解がしやすいであろう。「応試」教育とは字の如く試験に対応した教育という意味で、批判の対象となってきたものである。これに関連するキーワードは、「受動的」、「暗記」となり、一方で「素質」とはその反対の「主体的」、「思考」、さらには「個性」が浮かんでくることになる。現在、「素質教育」は中国政府の目指すべき学力観を示す語になっている。國務院は、1990年代の議論を経て1999年に「教育改革を深化させ素質教育を全面的に推進していくことに関する決定」を公布した。現在の教育改革はこの「決定」を受けて教育部から出された「基礎教育課程改革綱要（試行）」に基づくものであり、「素質教育」の考え方を全面的に発展させたものである。

ところが「応試教育」という言葉がいまだにみられるように、一般に中国の教育はとりわけ大学入試を中心としているとしばしば批判される。したがって高級中学（日本の「高等学校」に相当）教育課程の修了時に実施される大学入試が、逆に高校教育に影響を与えていることは容易に想像がつく。とすれば、教育課程改革で新しい試みをしたとしても、現行の大学入試が存在する限り実質的には成果を得られないのではないかとという疑問も当然生じることになる。

本稿では以上の状況に鑑み、中国の教育課程のキーワードである「素質教育」や「全面発達」が大学入学者選抜においてどのように活かされているのかについて考察を深めていくことにする。言い換えれば、近年の大学入試改革のポイントを高級中学教育課程との関連で明らかにしようとするものである。

ところで中国の大学入試の特徴として指摘できる第一の点は、省別に入学者選抜が行われていることである。1990年代まで試験問題は全国共通であったが、現在では省ごとに試験問題も作題しているため、各省で科目数や科目内容が異なり、中国全体として議論していくことは困難である。そこで本稿では、江蘇省のケースをもとに論じていくことにしたい。江蘇省は、中国の沿海部、中国経済の中心地である上海市に隣接する省で、省民の平均所得も高く、教育水準も高い「先進地域」である。省内には省都南京市をはじめいくつかの市にいわゆる名門大学を抱え、人々の教育への関心も高く、大学入試は最も競争の激しい省の一つであると言われている。また教育改革も他省に先駆けて実施してきている「先進」省である。以下では筆者が現地での収集できた資料をもとに「素質教育」と大学入試改革の実態に迫っていくことにする¹。

1. 「素質教育」の影響

(1) 「素質教育」の学校での解釈

中国における現在の教育課程改革は、2001年の「基礎教育課程改革綱要（試行）」から一部の実験地区で開始したが、高級中学の場合は、2004年から一部の省で実験が始まり、2012年に全国で実施されることになった。そして、その特徴の核心にあるのは「素質教育」の浸透である。この点は、2010年に提出された「国家中長期教育改革と発展計画綱要（2010-20120）」においても最初に「素質教育の全面的な実施」を謳っていることから明らかである。

「素質教育」は一言で言えば、知育・徳育・体育のすべてにバランスのとれた21世紀の社会で活躍できる人材育成のための教育といえるが、高級中学での実践との関係でとらえた場合、教師たちは主に二つの意味に解釈していることが明らかとなった²。一つは、国が定めた科目すべてを時間通りに行うこと、具体的に言えば、「技術」、「音楽」、「美術」、「体育と健康」等も学校側が十分に授業実践することである。従来、これらの科目は大学入試に直接関係しないため、学校側はそれほど重視しない傾向にあった。したがって、そうした当然のことを実施するだけでも「素質教育」になるという解釈である。また、学校によっては、正規の授業時間の「体育と健康」に加えて、毎日1時間（午前30分、午後30分）、業間に体を動かす時間を設ける場合もみられるほどである。

ある高級中学の校長は「入試には四つの能力が必要で、具体的には知識量、知力、精神力、体力である。高級中学はこれら四つの力を育まなければならない。」³と発言している。言い換えると、入試の成績が良い人は、四つの能力のバランスがとれている人で、そのため高級中学としてはそれらにバランスよく力を入れることで「素質教育」を発展させることができると考えているのである。この発言には「知識量」と「知力」の関係等、検討しなければならないことはあるが、少なくとも知識偏重の姿勢にないことは明らかとなる。

(2) 教育課程の多様化—必修科目—

「素質教育」実践の二つ目の解釈として、教員たちは、学校主催の諸活動に力を入れ、主体性や協働性を培うことであると捉えている。

現在の高級中学の教育課程は2003年に公布された「普通高中課程方案（実験）」に基づいている。これは2004年から一部の省で導入が始まり、その後徐々に導入省を増やしていき、2012年に全国で実施されることとなったものである⁴。その具体的な科目等を示した

のが以下の表1である。

表1から、中国の高級中学の教育課程は、「必修課程」（「科目」と「単位」が示されている部分）、「選択Ⅰ」、「選択Ⅱ」という三つに区分されていることがわかる。そのうち、「必修課程」は「言語と文学」、「数学」、「人文と社会」、「科学」、「技術」、「芸術」、「体育と健康」、「総合実践活動」という8つの「学習領域」に分かれており、各領域には複数の科目が設定されている。例えば、「言語と文学」には「語文」（日本の「国語」に相当）と「外国語」の二科目、「人文と社会」には「思想政治」、「歴史」、「地理」の三科目、「科学」には「物理」、「化学」、「生物」の三科目が含まれていて、こうした各科目に関して修得単位数が規定されており、それらの合計が116単位である⁵。つまり、現在の高級中学生は将来の進路が進学・就職に関わりなく、こうした科目について単位を修得しなければならない。

表1 高級中学の教育課程（2003年）

学習領域	科目	単位	選択Ⅰ	選択Ⅱ
言語と文学	語文	10	人材の多様化に対する社会のニーズに基づき、生徒の様々な潜在能力や発展のニーズに応じ、必修課程を基礎として、各課程標準の分類ごとにレベルを分けて選択モジュールを設け、生徒に提供する。	学校が各地域における社会、経済、技術、文化発展のニーズや生徒の関心に応じて選択モジュールを開設し、生徒に提供する。
	外国語	10		
数学	数学	10		
	思想政治	8		
人文と社会	歴史	6		
	地理	6		
科学	物理	6		
	化学	6		
	生物	6		
技術	技術	8		
芸術	芸術、音楽、美術	6		
体育と健康	体育と健康	11		
	研究性学習	15		
総合実践活動	コミュニティサービス	2		
	社会実践	6		

出所) 魏国棟・呂達(編)『普通高中新課程解析』人民教育出版社, 2004年, 88頁をもとに筆者作成。

そして教員たちが「素質教育」と強く関連付けているが表1の下段にある「総合実践活動」領域である。そのなかに含まれる「社会実践」では、生徒は毎学年1週間の軍事訓練や農業等の社会実践活動に参加する。また、「コミュニティサービス（原語：社区服務）」では、生徒は3年間で10日以上時間を充てる必要があると示されている。この「コミュニティサービス」は、学校側が提供する内容でも、生徒自身が決定する内容でも良いが、後者の場合は学校による審査が必要となり、実践はグループとして行う。単位の認定は、「コミュニティサービス」の実践過程での生徒による記録や、コミュニティ側が提供する実践報告内容や実践時間に関する資料に基づき、学校が行う。

また、「研究性学習」については、何らかのテーマ

に関する研究内容をレポート等にまとめるものである。「研究性学習」の15単位は、3年間の合計であり、学校は生徒や教員の状況に応じてその内容を組み立てることができる。例えば、三つの課題を課し、それぞれ5単位としてもよいし、大課題と小課題を一つずつ課し、それぞれ10単位と5単位としてもよい。また、一つの課題のみで15単位を認定することも可能である⁶。こうした点は学校の裁量に任されている。

(3) 教育課程の多様化—選択科目

一方、「選択Ⅰ」には「必修課程」の内容をより発展させたものが含まれ、通常生徒は大学入試を念頭に置いて必要な科目の発展的内容を選択履修することになる。次に、「選択Ⅱ」には地域や学校の状況、生徒の関心等を考慮した内容が含まれることになる。ただし、実際は「選択Ⅱ」には学校が独自に開設する「校内課程」が主に設けられ、さらに「選択Ⅰ」に含まれる内容も「校内課程」として扱うことが可能である⁷。また、規定上は、「選択Ⅱ」から最低6単位を修得し、「必修課程」の116単位と合わせて合計で144単位の修得が必要とされているが、実際には学校側が生徒の履修単位数を144単位以上に設定することが可能である。したがって、これら「選択科目」で生徒たちに何を学ばせるのかは、学校独自の教育目標や教職員の考えによって決定されているといえる。実質的に受験対策に当てるのが進学校では常識になっているようであるが、ここで学校の特色を打ち出すことも可能である。筆者が訪問した学校では、「校内課程」は、木曜日午後2時限に行われ、様々な内容（グループで天文や植物等の実験を行うもの、無線や航空模型に関するもの等）が提供され、生徒はそこから一つ選択することになる。教員たちはこうした授業は素質教育の一部であると認識していた。また、課外活動も盛んであり、授業のない金曜日第8限や土曜日に学校側は場所を提供して一部の生徒が自主的に活動を行っているという。教員はこれも「素質教育」として認識している。

このように、現行の教育課程では高級中学側の管理自主権が強調されている点は留意すべきであり⁸、また高級中学自体もそれを積極的に活用している点も注目し得る。こうした教育課程の管理自主権が増大していく背景には、高級中学進学率の上昇に伴う学力や興味関心の点で生徒の「多様化」もあったことは確かである。例えば、2009年には79.2%の生徒が高級中学に進学しており、「国家中長期教育改革と発展計画綱要（2010-2020年）」で「高等教育機関へ優秀な生徒を送り出すと同時に、質の高い多くの労働者を養成する必要がある」⁹とされる普通高級中学では、個別の

要求にもできるだけ応えるため選択科目を増加させてきたのであった。

さらに、こうした教育課程の多様化は、高級中学全体の多様化、つまり各校が特色ある高級中学を目指すことになる¹⁰。また、直接海外の大学への進学を目指す国際班を開設したり、美術クラス、音楽クラス、体育クラスとして生徒を募集し学校内でも多様性を維持しているという¹¹。こうしたクラスの生徒は、卒業後美術大学や音楽大学を目指すことになるのであるが、興味深いのは、この学校は、国レベルの女子バレーの基地として承認されているため、将来国の代表となる可能性の高い生徒が特別枠で入学してくることである。つまり、有名大学への進学実績だけでなく、スポーツの世界でもこの学校は名声を得る機会を有しているといえる。学校間競争が激化するなか、学校が生き残りをかけてどこに活路を見出すかは、校長をはじめとする学校管理者の才覚にかかっているといえるのである。

2. 大学入試制度の改革

(1) 入学者選抜の実際

中国では基本的に6月に各省で実施される「高考」と呼ばれる大学入試の結果で合否が判定されることになる¹²。そしてそれに先立つ5月に江蘇省教育考試院から刊行される『江蘇招生考試』は、省内の受験生に対して当該年度の学生募集状況をまとめた大型の冊子であるが、省内の全ての受験生はこの冊子を参考にして志望大学を決定することになる。そこには省内の受験生が出願できる大学・学科名や募集人数、出願にあたっての条件がそれぞれ詳細に記されている。北京大学等のいわゆる全国レベルの大学は全省から学生を募集し、それぞれの学科が省ごとに定員を割り振っているため、実質的には省内の競争になる。例えば、江蘇省内の大学である南京大学の「漢語文学」は2015年の募集人数がわずか8人である¹³。これは定員を他の多くの省にも割り当てているので省内の人数がこうした少数になると推察できる。一般的には、省内の大学は当然のことながら省内の受験生に最も多くの定員を割り当てる傾向にあるので、有名大学を多数抱える省は有名大学への入学が有利になると言われている。

大学入学試験が終わると3週間ほどで個人成績が開示され、同時期に募集時期別合格最低ラインが発表される。大学はそれぞれ文理別に一期校（中国では一般に「一本」と呼ばれる）、二期校（「二本」）、三期校（三本）、専科校（日本の短期大学に相当）にグルーピングされ¹⁴、受験生は各グループにつき、第三志望まで

の大学と各大学6学科まで志願が可能である。大学による選抜時期は二段階に分かれており、第一段階では7月の中旬から一期校、下旬に二期校の順番で入学者選抜が行われる。なお、合格最低ラインは一期校の総募集定員と受験生の得点を勘案して教育考試院が決定するが、それはあくまで全体の最低点なので、志望大学学科の倍率が高い場合、最低点を大幅に上回っていないと合格の可能性は低いことになる。したがって実際にどの大学に出願するかは、過去の実際の合格最低点（毎年1月頃教育考試院から公開される）や受験生の動向等を参考にして決めることになる。仮に試験で高得点をとっても倍率が高い大学・人気学科のみを志望したために全て不合格となる可能性も出てくるのである。その場合、二期校での合格を狙うか、再受験をするか選択を迫られることになる¹⁵。

第一段階が終了した8月上旬からは第二段階の三期校と専科校の選抜が始まる。これに出願するのは、第一段階の選抜で合格していない受験生である。ここでもそれぞれ合格ラインが公開され、それを上回っている受験生が出願することになる。そこでも同じように志望大学を3校6学科まで選択することになる。

(2) 選択幅のある入学試験へ

こうしたプロセスを経て入学者が選抜されていくが、その合格の判断基準となる入学試験科目については紆余曲折を経てきた。江蘇省の場合も他の多くの省と同様、文理別の試験である。「語文」、「数学」、「外国語」が文理で共通しており（ただし「数学」の問題は文理別）、それ以外に文系は「歴史」と「政治」、理系は「物理」と「化学」の試験を課し、文理それぞれ5科目の合計点で合否を判定していた。

ところが、2000年に入ると改革の目玉として江蘇省では「3+小総合」方式が登場することになる。この「3」は「語文」、「数学」、「外国語」であり、全国的には「3+X」方式と呼ばれるものである。「X」に該当する試験科目は各省が判断するものであり、従来の受験科目数(5科目)を減らすことを目指していたのであった。江蘇省の場合は「総合問題」を導入することによって試験科目を減らすことになった。ただし実質的には文系は「歴史」、「政治」、「地理」を統合した「総合問題」、理系は「物理」、「化学」、「生物」を統合した「総合問題」であり、受験生の負担軽減とはいかなかったようである。ここで「小総合」と称されるのは、「総合問題」が文理別になっているからである。それでも日本と同様に、知識の統合、知識の活用が叫ばれていた当時、新たな試験科目として世間の注目を集めることとなった。

ただ、「総合」を名乗るからには文理も分けるべきではないという意見も当然生じた。そこで2002年に文理別に分かれていた「総合問題」を文理に分けずに「総合問題（大総合）」として出題することを試みた。文理それぞれの3科目を統合した、実質的には6科目を統合した問題であった。これには、すべての受験生に6科目を課すとしての批判が各方面から起こり、この試みは1回のみで終了した。この変更には、受験生への過度な負担への批判とともに、「総合問題」は既存の科目の寄せ集めで必ずしも思考力や判断力を問うものとなっていないという見方もあった。

その後2003年からは「3+1+1」方式を採用することになった。このうち最初の「3」はこれまでと同様の「語文」、「数学」、「外国語」であり、「1+1」は、文系の場合、「歴史」、「政治」、「地理」から1科目とその後選択しなかった文系の残り2科目と「物理」、「化学」、「生物」のなかから1科目を選択するというものである。理系の場合はその逆となる。つまりこの方式であれば文系の受験生の選択が、例えば「歴史」と「政治」でも、あるいは「地理」と「物理」でも可能となり選択の幅が広がったことになる。

(3) 全ての学習領域をカバーする入学試験へ

こうした過程を経て2008年から新たな入学者選抜が導入されることとなった。それは「3+学業水準試験（学業水平測試）+総合素質評価」である。その要点を示したものが、以下の表2である。

表2 大学入学試験（高考）科目

3	学業水準試験		総合素質評価
語文 数学 外国語	政治 歴史 地理 物理 化学 生物 技術		道徳品質 公民素養 学習能力 交流と合作 運動と健康 審美と表現
	選択科目（2科目）	必修科目	
	文系：歴史 + 1科目 （技術を除く）	選択科目以外	
	理系：物理 + 1科目 （技術を除く）	の5科目	

出典）江蘇省教育考試院『報考指南・2015年江蘇省普通高校招生百問』南京大学出版社、2015年、1頁をもとに筆者作成。

表2で示している通り、「3」とはそれ以前と同じ「語文」、「数学」、「外語」である。この部分には変更はみられない。それ以外の試験科目となっているのは、表中の「学業水準試験」の7科目である。試験科目だけ

て言えば合計10科目とさらに増加してきていることが確認できる。これは「素質教育」との関係で教育課程全体に対応する試験が求められてきているからである。

この「学業水準試験」は表2に示されているとおり、「選択科目」と「必修科目」に分けられる。前者の「選択科目」は文系の場合、「歴史」とそれ以外の1科目である（ただし「技術」を除く）。この場合、選択の幅は広く、「物理」や「生物」を選択してもよいことになる。一方、理系の場合、「物理」とそれ以外から1科目選択をすることになる。そして、それら以外の残りの5科目が「必修科目」となる。この「必修科目」という名称は混乱を招きやすいが、わかりやすく言えば、試験の際には、先に教育課程の「必修」部分の内容から出題される基礎的な試験になる。また、「技術」は「必修科目」として文系、理系を問わず受験しなければならないが、「必修科目」の統一試験時に同時に試験が行われるのではなく、各高級中学での通常の授業を通して学校が合格・不合格で判断することになる。

さらに近年の改革で注目されるのは「総合素質評価」であり、「道徳品質」や「公民素養」等6つの項目を評価し成績をつけることになっている。これらは「素質教育」との関係が特に強い部分であると言える。これらは高級中学側で評価することになるが、「道徳品質」、「公民素養」、「交流と合作」は合格・不合格で評価され、「学習能力」、「運動と健康」、「審美と表現」はAからDの4段階で評価されることになる。実はこれらは教育課程のなかの「芸術」領域、「体育と健康」領域、「総合実践活動」領域に対応しており、したがって高級中学教育課程のほぼ全てに対応した入学試験になっていることが確認できる。こうした「総合素質評価」の成績は、入学者選抜の際に参考にされ、仮に総合得点が高くてもDの成績があれば不合格になり、逆にAがあれば総合得点が同点の場合に優先的に入学許可されることになる。また「道徳品質」と「公民素養」が不合格の場合は、そもそも入学試験に参加することができない¹⁶。

3. 素質教育と負担軽減

(1) 多くの試験科目で段階別評価へ

中国の大学入学試験の壮大さは日本でも時折紹介され分析されてきたが¹⁷、その際批判されてきたことは、一発勝負型入試に係る精神的な負担であった。6月上旬の3日間に実施される試験は基本的に各科目の筆記試験であり、その合計点で合否が判断されることになっていた。当然のことであるが、その際1点でも多

く得点した受験生が合格するのであり、1点1点を上乗せするために受験生は長期間にわたり受験勉強に励むことになる。

精神的負担を軽減させるための方策の一つとして考えられたのは、試験科目数を減らすことであったが、前節でみてきたとおり、改革の方向性はそれとは逆で、試験科目の増加であった。その背景としては、実は中国では、高級中学教育の質保証のため大学入試以外にいわゆる高級中学卒業資格試験に相当する「会考」が1990年代後半から実施され、その全ての科目の合格が高級中学の卒業要件であり、さらに大学入学試験への参加資格になっていたのである。ただし、当時その「会考」と大学入試とは異なる性質の試験であるため、「会考」の成績が大学入試に影響を与えることはなかった。

その後、学力が全体的に高くほとんどの高級中学卒業生が大学入学試験を受験する江蘇省では、この「会考」は一部で大学入学試験科目との重複がみられることや、教育課程での「必修」部分のみを扱うために容易で卒業試験としてはあまり効果がないことを指摘する声が多かったこと、さらには入学試験と結びつけた方が良いという声もあがったことで廃止され、それに代わって学業水準試験が登場したのである¹⁸。

その際、新たな試みとして登場したのが段階別評価であった。「学業水準試験」の「必修科目」は計5科目であるが、そのうち「技術」は各学校での「技術」の成績から合格か不合格かを判断されるので、実質的な統一試験としては4科目になる。その試験（教育課程上での「必修」部分のみから出題されるため難易度は高くない）は100点満点であるが、評価としては4段階、すなわちA（100-90点）、B（89-75）、C（74-60）、D（59-0）となる。Dは不合格の意味である。これは、点数による絶対評価なので多くの生徒がAになることも可能である。

一方、「選択科目」2科目（教育課程上での「選択」部分も含まれるので先の「必修試験」より難易度は高くなる）は120点満点でA+（5%）、A（5%-20%）、B+（20%-30%）、B（30%-50%）、C（50%-90%）、D（90%-）の6段階に評価されることになる。この段階別評価は相対評価であり、受験生内での順位が重要になってくる。

ただし、大学入試科目全てを段階別評価にすると、もともと受験者が膨大である江蘇省の場合、同一段階に大量の受験者が該当し、選抜資料として支障をきたすことになる。そのため、少なくとも現段階では全ての科目を段階別評価にすることはできない。そこで最重要科目である「語文」、「数学」、「外国語」は1点刻みの点数評価を採用している。これら3科目は文理共通であるが、文系は「語文」に付加課題が設けられ、

一方理系は「数学」に付加課題が設けられる。合計点は「語文」、「数学」、「外国語」の順で、文系は200点、160点、120点の480点満点、理系は160点、200点、120点の480点満点である。先にみた一期校、二期校等の合格ラインの点数はこの3科目の合計点となる。

そして、この総合点に対して、学業水準試験の「必修科目」がAの場合、1点ずつ加点していくことになる（4科目全てがAで「技術」合格の場合、5点を加点）。多くの受験生が1点刻みで並んでいる状況では、これら1点を加算する意味は決して小さくないと言える。

また、こうした段階別評価結果と入学者選抜との関係は、全ての受験生が参照する『江蘇招生考試』の大学別募集人数欄の部分に明確に示されている。例えば南京大学の文系の場合「選択科目要求AA、必修科目要求4C 1合格」と示されている¹⁹。これは、受験生に対して大学側が要求する学業水準試験の成績の条件を示している。すなわち、南京大学の文系の場合、多くの受験生が選択すると予想される「選択科目」の「歴史」と「政治」（上述したとおり「歴史」以外の科目は自由に選択できる）の成績が両方ともA以上でなければならないことになる。既述のとおり、「選択科目」は相対評価なので、当該科目の全受験者のうち成績が上位20%以内に両科目とも位置づいていなければならないことになる。さらに言えば、出願に当たっての条件がAAであっても最終的な合否判定では「語文」、「数学」、「外国語」の総得点に加えて、こちらの段階別成績も勘案されることになるため、できれば上位5%以内を意味するA+の成績をとることが望ましいとされている。

一方、「必修科目」の「4C1合格」は「必修科目」として選択した4科目がC以上の成績で「技術」科目が合格であることを意味している。こちらの段階別評価は絶対評価であり、しかもC以上ということは合格最低ライン（60点）以上であれば良いということでもそれほど厳しいものではない。ただし、文系でも「物理」や「化学」等で合格点を要求されていることは特筆すべきである。なお、入学者選抜時にボーダーラインにいる受験生の場合、この「必修科目」の成績も考慮される場合があるので、できるだけ高い点数をとることが望ましいとされている。先にみたとおり、A評価の場合、総得点に1点が加点されることになっているのでその意味でも良い成績が望まれるのである。

（2）精神的圧力の軽減—試験時期の分散化

こうした試験にかかる受験生への精神的負担は想像に難くないが、軽減する可能性がある方策として受験

中国高級中学の教育課程にみる多様化策
 一 江蘇省の大学入試改革との関連に注目して一

機会の複数化も挙げられる。しかし、中国ではこうした議論はなされても実現には至っていない。その大きな理由の一つは、あくまでも試験は、学習指導要領にあたる「課程標準」の内容を十分に学んできているかを評価しようとするものだからである。したがって高級中学の教育課程の修了時でなくては試験を実施できないということである²⁰。先に述べた学業水準科目の「必修科目」4科目は基礎的な内容を問う文字通り「必修」部分の試験であるため、修了時以前に実施することが可能である。しかし少なくとも現段階での大学入学試験は、「語文」、「数学」、「外国語」と、「選択科目」は教育課程上の「必修」と「選択」の部分の両方から出題されるため、複数回の実施は困難である²¹。

こうした点を考慮して考え出された方策が、各科目の試験の時期を分散することである。学業水準試験の「必修科目」を先に実施し、少しでも受験生の負担を減らそうとしたのである。以下の表3は、2015年の試験日程を示したものである。

表3 大学入学試験（高考）及び学業水準試験の日程

	統一科目		選択科目	必修科目	
	6月7日	6月8日		3月28日	3月29日
午前	語文 9時～ 11時30分 (文科の 受験生は 30分延長)		物理 歴史 9時～ 10時40分 (2科目同時に 実施)	物理 (8時30分～ 9時45分)	歴史 (8時30分 ～9時45 分)
				政治 (10時45分 ～12時)	化学 (10時45 分～12時)
午後	数学 15時～ 17時 (理科の 受験生は 30分延長)	外国語 15時～ 17時	化学・生物・ 政治・地理 15時～16時40 分 (4科目同時に 実施)	生物 (14時～15 時15分)	
				地理 (16時15分 ～17時30分)	

出典) 江蘇省教育考試院『報考指南・2015年江蘇省普通高校招生百問』南京大学出版社, 2015年, 26頁(部分修正)。

表3が示すとおり、大学入学試験日は6月7日から9日の3日間である。「語文」、「数学」、「外国語」を1、2日目に実施し、学業水準試験の中から選択した2科目の試験が3日目に実施される²²。一方、「必修科目」は3月下旬に行われている。ただし、ここで注意が必要なのは、毎年3月に実施されるこの「必修試験」の受験者は、大学入試（「高考」）を直前に控えている高級中学3年生ではなく、大多数が高級中学2年生であるということである。先に述べたとおり、試験内容が教育

課程の「必修」部分のみであるため、高級中学2年生でも受験が可能であり（高級中学教員の間では「小高考」と呼んでいる）、そこで合格点(C以上の成績)を収め、残りの受験科目に集中していくことになる。なお、ここで不合格の科目がある生徒や成績に不満のある生徒は次年度（高級中学3年時）に再度受験することもできる。ただし、その直後に大学入学試験を控えているため、時間的には非常に厳しいと言わなければならない。この「必修科目」でD(不合格)のある生徒は大学入試に参加できないということも留意が必要である。

このように、現在の大学入試では、高級中学で履修する全ての科目が入試科目に含まれているという見方も可能である。「素質教育」は人格教育の意味もあり、したがって「総合素質」の項目も含まれている。これらも試験科目として合否判定に用いられることは中国の特徴であると言える。

おわりに

以上本論で、近年の中国が推し進める教育課程改革について、大学入試の視角から論じてきた。本論で論じたことをまとめると以下の三点が指摘できる。

第一に、教育課程の多様化は科目数の増加、選択科目の増加を意味したが、ともすれば受験科目に偏りがちな日々の授業を改め、こうした多様化した内容をしっかりと履修させることが「素質教育」の実質化であった。この点を実りあるものにするためにも大学入試と連動させる必要があり、実際江蘇省では試験科目数を増加する方向で進んできたことが確認された。例えば一般的に芸術科目や体育科目は軽視されがちになるが、大学入学試験における「総合素質評価」の範疇でこれらの科目を反映させることを意図しており、その意味で「素質教育」を徹底させてきていることがわかる。

第二に、受験生の負担軽減という意味においては受験科目の削減が挙げられ、その意味では、個々の知識を活用し、表現力や判断力を問う「総合問題」も一つの方策として考えられた。しかし、現実には高級中学で履修する全ての科目・活動を大学入試に関連させようとする方向に進んでいることがわかった。これこそが「素質教育」の大学入試への最大の影響とみることが可能である。もちろん段階別評価や試験実施日の分散等の策も講じているが、これらがどれだけ功を奏しているかは検討の余地がある。

第三に、「素質教育」で重視する「主体性」や「表現力」を丁寧に評価しようとするれば、面接や小論文試

験の導入も一案であると考えられる。当然、そうした入試も「自主募集」として一部の大学で導入されているが、その広がりはいずれも、大多数は試験の点数で合否が決定される。その背景としては、多数の受験生を対象としてそうした評価を行うことは困難であるということに加え、一方で、中国における学力の捉え方が、「表現力」や「主体性」より、むしろ幅広い知識を得ることとして捉える傾向が強いのではないかという推測も成り立つのである。

江蘇省では大学入試の大改革はまだ一段落しておらず2020年からさらに新しい入試制度を導入することが予告されている。「素質教育」の展開を検討するためにもその行方に目が離せないのである。

【注】

- 1 本論文は2014年9月と2015年10月に訪問した江蘇省南京市内の高級中学（A, B, C）3校及び2015年10月の同時期に訪問した江蘇省教育考試院での聞き取り調査と現地で収集した文献や資料を主な材料として分析している。現地で筆者の聞き取りに応じていただいた関係者の皆様にご挨拶を申し上げます。
- 2 2015年9月11日 B 校教員への聞き取り調査より。
- 3 2015年10月21日 C 校校長への聞き取りより。
- 4 馬雲鵬「基礎教育課程改革：実施進程、特徴分析と推進策略」『課程・教材・教法』第29巻第4期，2009年，4-5頁。
- 5 付宜紅（編）『普通高中課程建設与管理』北京師範大学出版社，2010年，277頁。
- 6 同上，11-12頁。
- 7 魏国棟・呂達（編）『普通高中新課程解析』人民教育出版社，2004年，89頁。
- 8 付宜紅（編），前掲書，3頁。
- 9 付宜紅（編），前掲書，1-2頁。
- 10 何善亮「江蘇省高中課程基地建設的實踐探索与理論思考」『教育科学研究』2015年，57-63頁。及び2014年9月21日 A 校校長への聞き取りより。
- 11 2015年10月21日 C 校校長への聞き取りより。
- 12 現在の入試においては、1月に実施される大学自主募集も存在する、これは「面接」、「小論文」、「調査書」等で大学側が選抜して仮合格者を決定し、6月の「高考」で大学側が設定する基準点に達すれば正規の合格となる。ただしこの制度を採用しているのは、北京大学や清華大学等特に難関と言われる大学のみで、その大学でも募集人数のわずか5%以内に

留まっている。つまり大多数の受験生は6月の試験結果で合否が決まることになると言える。

- 13 江蘇考試院『江蘇招生考試』，2015年，5頁。
- 14 詳細には、文理別以外に、「体育、芸術」という区分もある。さらには一期校の前に軍や警察関係の高等教区機関が含まれる「事前校」もある。論を進めていく関係上、極めて煩雑になってしまうため、本文では文系と理系のみを扱う。
- 15 ただし考試院での筆者の聞き取りによれば、実際に志望者のデータが各大学に送られた後、文系、理系別に総募集定員を考慮してまず大学全体としての合格者を決定する。その後、大学側は合格者の志願表を見ながら特定の学科に振り分けているようである。その際、得点順に志望学科に振り分けていくか、志望学科を優先してその志望者の中で高得点順に振り分けていくか、という二通りの方法があるが、どちらを採用するかは大学の判断に任されているようである。
- 16 江蘇省教育考試院『報考指南・2015年江蘇省普通高校招生百問』南京大学出版社，2015年，10-11頁。
- 17 近年の代表的なものといえば、大塚豊『中国大学入試研究』東信堂，2007年。南部広孝『東アジアの大学・大学院入学者選抜制度の比較』東信堂，2016年，が挙げられる。
- 18 2015年10月21日江蘇省教育考試院での聞き取りによる。
- 19 江蘇考試院『江蘇招生考試』，5頁。
- 20 2015年10月21日 C 高級中学校長への聞き取りより。それ以外にも、複数回実施する場合の難易度の調整ができていないこと、受験生がそもそも大量であるため事務処理上困難をきたすこと等が挙げていた。
- 21 ただし C 高級中学の校長の話では、「外国語（英語）」のみ、年2回実施の方向で検討しているという。次の入試改革が予定されている2020年から複数回実施の可能性もある。
- 22 「外国語（英語）」の試験の一部であるスピーキングの試験も事前に（2015年の場合3月21，22日）に実施されている。

【付記】

本稿は、日本学術振興会「平成27～29年度科学研究費補助金（基盤研究（B）・課題番号 JP15H05197）（アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究・研究代表者：小川佳万）の交付を受けて実施した研究成果の一部である。